

LA SALLE DE BAIN
Jean-Philippe Toussaint

ジャン＝フィリップ・
トゥーサン

野崎歓・訳

浴室



浴室

LA SALLE DE BAIN
Jean-Philippe Toussaint

ジャン=フィリップ
トゥーサン

工業学院图书馆
藏书章



野崎 敏 (のさき かん)

1959 年新潟生まれ。1981 年、東京大学文学部仏文科を卒業。同年、東京大学大学院修士課程に進学。1985 年秋から三年半、フランス政府給費留学生としてパリ第三大学博士課程に留学。ジェラルド・ド・ネルヴァルを中心とする 19 世紀文学を研究。現在、一橋大学法学部助教授。

LA SALLE DE BAIN

by Jean-Philippe Toussaint

© 1985 by Les Editions de Minuit

This book published in Japan by arrangement
with Les Editions de Minuit, Paris.

through Bureau des Copyrights Français, Tokyo

浴室

一九九〇年 一月一〇日 第一刷発行
一九九四年 一月一五日 第二十四刷発行

著者 ジャン・フィリップ・トゥーサン

訳者 野崎 敏

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

一〇一五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

電話 編集部 (〇三) 三三三〇一六〇九四

販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

©1990 Shueisha

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

パ
リ

直角三角形の斜辺

パ
リ

ジャン・フィリップ・トウーサン登場

装丁 木村裕治

協力 コリーヌ・ブレ

浴

室

直角三角形の斜辺の二乗は他の二辺の二乗の和に等しい。

ピタゴラス

ハ

リ

(1) 午後を浴室で過ごすようになった時、そこに居を据^すえることになろうとは思ってもみなかった。浴槽の中で思いをめぐらせながら、快適な数時間を過ごしていたにすぎない。服は着たままの時も脱ぐ時もあつた。エドモンドソンはぼくの頭の横にいるのを好み、ぼくが前より晴々とした様子に見えると言つた。ぼくが何か冗談を言つて、二人で笑うこともあつた。浴槽はやっぱり縁が平行で、背もたれは斜め、底は平らで足置きを使う必要のないものに限る、などと身ぶりたつぷりに力説したりした。

(2) エドモンドソンは、浴室から出ることを拒むぼくの状態に、心を萎^{しほ}ま

せるものを感じていたのだが、それでもぼくの暮らしを助けてくれるのだった。アートギャラリーでパートで働いて家計を賄^{まかな}ってくれていたのだ。

(3) ぼくのまわりには戸棚、タオル掛け、ビデがあった。洗面台は白で、その上にせり出した板に歯ブラシと剃刀^{かみそり}が転がっていた。正面の壁には、厚塗りのペンキがところどころ玉になっていて、ひび割れが走っている。くすんだ色のペンキのあちこちにクレーターのような穴がぼつぽつあいている。ひと筋の割れ目が特に広がりつつあるように思われた。ぼくは何時間もその端に目を凝^こらして、ひびの進行ぶりを突き止めようと空しい努力をした。時々、別の実験を企てることもあった。手鏡に自分の顔を映し、その表情と、腕時計の針の進行とを同時に見較べるのだ。しかしぼくの顔は何もおもてに浮かべなかった。決して。

(4) ある朝、ぼくは物干しロープをはぎ取った。戸棚を全部空けて、棚の物を取払った。洗面道具一式を大きなゴミ袋に押し込んでしまい、蔵書の一部の引越しを開始した。エドモンドソンが戻った時、ぼくは、一冊の本を片手に、長々と寝そべり、蛇口の上に両脚を組んだ姿で迎えた。

(5) エドモンドソンはついにぼくの両親に訴えた。

(6) 母さんはケーキを持ってやって来た。ビデの上に腰を下ろし、足のあいだに置いた菓子箱の口を大きく開けて、スプーン皿の中にケーキを並べた。心を悩ませている様子で、やって来てからずっと、ぼくの視線を避けている。物悲しげに、元氣なく頭を上げ、何か言おうとして口を嚙み、エクレアを一つ選

んでばくばく食べた。気晴らしをしなければだめよ、スポーツをするとか、わからないけど何かあるでしょ。そう言って口の端を手袋で拭^{ぬぐ}った。気晴らしの必要があるのかどうかは疑問だなあ、とぼくは答えた。ほとんど微笑さえ浮かべながら、ぼくにとって気晴らしほど恐ろしいものはないんだよ、と付け加えると、母さんはとても話にならないとわかったらしく、ぼくに機械的にミルフイーユを差し出した。

(7) 週に二回、フランス・サッカー選手権の模様を伝えるラジオのスポーツ・アワーを聴いた。パリのスタジオにいる司会者が、各地のスタジアムで試合経過を追う特派員たちの声をつないで放送するのだ。サッカーの試合は想像してこそ面白味を増す、という意見のぼくは、この放送を逃さず聴いた。熱気を帯びた声の響きに身を委ね、部屋の明かりを消し、時には目をつむって中継

を聴いた。

(8) 両親の友人が、パリに立ち寄ったついでにぼくを訪ねてきた。外は雨だよ、と彼は言った。ぼくは腕を洗面台の方に伸ばして、タオルを使うように勧めた。黄色の方にしてください、もう一方は汚れてますから。彼は時間をかけて、念入りに髪を乾かした。一体ぼくに何の用なのかわからなかった。沈黙が支配しそうになった時、彼は自分の仕事の近況を語って、乗り越えがたい困難に突き当たったわけだよ、何しろ同じランクの役職にある者同士が性格的に合わないという問題が絡んでいるんだからね、云々、と説明した。神経質にタオルを使いながら、浴槽に沿って大股で歩き、自分の話に興奮して次第に激してきた。威嚇し、わめきちらした。ついには、ラウールの奴は無責任だ、と叫んだ。私は不可能に挑戦しているんだぞ、不可能にな！ と彼は言うのだった。

それなのに皆私を馬鹿にしおって。

(9) ぼくの身なりはシンプルなものだった。ページュのズボン、青いシャツに無地のネクタイ。体にぴったりなので、洋服の上からでも、しなやかでしかも逞しい筋肉の持ち主のように見えた。体を横たえ、リラックスして、目を閉じていた。そして、ダーム・ブランシュ「白い貴婦人」のこと、あの、丸く固めたヴァニラ・アイスの上に、やけどしそうに熱いチョココレートをたっぷりかけたデザートのことを考えた。この数週間というものの、考え続けているのだ。といっても、食べたくて仕方がないというのではなく、科学的な見地から、この取り合わせに完璧なるものの一例があると思うのだ。モンドリアンの絵。ヴァニラ・アイスにとろりとかかったチョココレート、熱いものと冷たいものの、堅固さと流動性、不均衡と厳密さ、正確さ。チキンでさえ、いかにぼくがチキ